

課題名：12 藻場の監視，有用海藻増殖法の検討

事業名：藻場回復基礎調査

予算額：979 千円（単県）

期間：平成 22 年度～

主担当：生産技術室（福本一彦）

目的：

県東中西部の 3 地点における藻場の状況を継続的に把握するとともに，有用海藻の増殖法を開発するために，有用海藻の生長，成熟に関する知見を収集する。

成果の要約：

3 地点ともに磯焼けは認められなかった。御崎海岸では 1999 年には確認されていなかったアラメの群落を観察された。ヒジキ群落は赤碕菊港周辺で確認された。酒津漁港沖防波堤内側におけるアカモク現存量は約 2.6 トンと推定された。

i) 試験の内容

a) 藻場監視基礎調査

2010 年 6 月に網代，酒津および御崎の各海岸において（図 1 の★），岸から 300m の範囲に沈子ロープを設置し，ライン上に 10m 間隔でコドラートを設置し，コドラート内に出現する優占種，水深等を記録した。

b) 有用海藻増殖試験

①ワカメ増殖のためのフルボ酸鉄収容試験

ワカメ増殖策の一環として，東浜漁港内および赤碕海岸において（図 1 の●），フルボ酸鉄を土嚢袋に収容した試験区と収容しない対照区を設け，各区に生育する海藻の被度を比較した。試験区は 2010 年 5～6 月に設置し，その後，8，12，3 月に観察を行った。

②ヒジキの生長および分布調査

菊港（図 1 の■）におけるヒジキの生長状況について把握するため，2010 年 8 月から定期的に全長を測定した。また，菊港周辺の海岸沿いを踏査し，ヒジキの分布状況を把握した。

③アカモクの現存量調査

アカモクの分布状況を把握し，現存量を推定するため，酒津漁港沖防波堤内側（水深 4.1m，図 1 の▲）において 2011 年 3 月 15 日にコドラート内に生育するアカモクを全て採取し，単位面積当たりの現存量を求めた。また，図 1 の⇔地点において，船上からアカモク群落の境界を探り，GPS で位置を記録し，地図ソフトを用いてアカモク群落面積を算出した。そして，単位面積当たりの現存量と群落面積の積からアカモク現存量を推定した。また，アカモクの最適漁獲時期を検討するため，2011 年 3 月に図 1 の▲地点においてアカモクを採取し，生殖器床を有する個体の割合等を求めた。

ii) 結果の概要

a) 藻場監視基礎調査

3 地点ともに磯焼けは認められなかった。御崎では，1999 年には確認されなかったアラメが距岸 40-180m

（水深 1.3-4.7m）地点に連続的に分布しており，幼体も確認された。一方，酒津では，ワカメが距岸 20-300m（水深 0.7-6.2m）地点に連続的に分布していた。

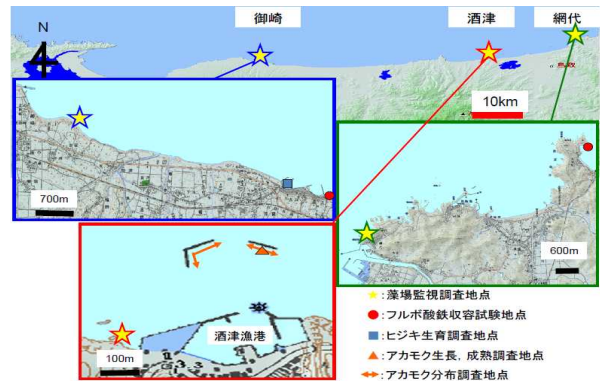


図 1 調査地点

b) 有用海藻増殖試験

① ワカメ増殖のためのフルボ酸鉄収容試験

東浜では 12 月以降，両区ともに漂砂の堆積が著しく，小型海藻等の生育はほとんど見られなかった。一方，赤碕海岸では，12 月にはフルボ酸鉄収容区の基質上をウミウチワやウスカワカニノテ等が覆っていた。ただし，対照区のブロックが流出していたことと，フルボ酸鉄収容区周辺の安定した基質にウミウチワが高密度で生育していたことから，フルボ酸鉄による藻類の明瞭な増殖効果は不明である。

② ヒジキの生長および分布調査

菊港におけるヒジキの平均全長は，8 月時点で 3cm の幼体であったが，3 月には 51 cm に生長していた。分布は菊港，西港および花見海岸で確認された。

③ アカモクの現存量調査

酒津漁港沖防波堤内側におけるアカモクは，水深 2.5-4.1m の転石帯等の限られた範囲で見られた（図 2）。群落面積は東沖防波堤内側で 231 m²，西沖防波堤内側で 10 m²，現存量は両地点併せて 2.6 トンと推定された。

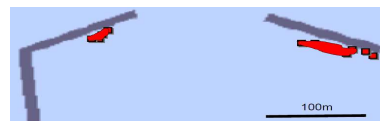


図 2 酒津漁港沖防波堤周辺におけるアカモクの分布

生殖器床は 3 月 15 日時点で 2.6% の個体に見られたが，生殖器床長は 4-6mm と短く，かつ 1 個体あたりの生殖器床数も 1-2 個と少なかった。

成果の活用：

調査結果を H22 年度サザエ・アワビ検討会，H22 年度日本海ブロック増養殖会議，H22 年度中国五県公設試験研究機関担当者会議で報告した。また，H22 年度アカモク調査結果を鳥取県漁協および県漁協酒津支所へ報告した。

関連資料・報告書：

H22 年度日本海ブロック増養殖会議要旨集。